

令和元年度 第2回芦屋市立美術博物館協議会 会議録

日 時	令和2年2月7日（金） 14：00～16：00
場 所	芦屋市立美術博物館 講義室
出席者	<p>会 長 藪田 貫 副会長 岡 泰正 委 員 中島 幸夫 委 員 若林 敬子 委 員 安部 太一郎 委 員 星野 剛一</p>
欠 席 者	<p>委 員 飯尾 由貴子 委 員 臼田 由香</p> <p>（芦屋市立美術博物館指定管理者） 館 長 石井 茂（株式会社小学館集英社プロダクション） 学芸員 室井 康平（株式会社小学館集英社プロダクション） 株式会社小学館集英社プロダクション 長滝 恵里 グローバルコミュニティ株式会社 青木 大介</p> <p>（事務局） 社会教育部長 田中 徹 生涯学習課長 茶嶋 奈美 生涯学習課 石田 直也 生涯学習課 石田 秀夫</p>
事 務 局	生涯学習課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	1 人

1 会議次第

- (1) 社会教育部長あいさつ
- (2) 議題
 - 1) 令和元年度事業報告について（4月から12月）
 - 2) 令和2年度展覧会事業計画（案）について
 - 3) その他
 - ・具体美術の周知について

2 提出資料

- 資料1 会議次第
- 資料2 委員名簿
- 資料3 芦屋市立美術博物館2019年度展覧会動員実績
- 資料4 芦屋市立美術博物館2019年度入館者数内訳
- 資料5 芦屋市立美術博物館2019年度事業報告書（管理運営基本方針）
- 資料6 芦屋市立美術博物館2020年度事業計画書

3 審議内容

（藪田会長）

それでは、始めさせていただきます。コロナウイルス、新型肺炎の影響で姫路城でも来場者数がぐっと減っていると伺っています。京都でも観光客数が落ち込んでいるということですので、皆さん外出を控えておられる。中国人観光客が来られていないというのもあると思いますが、日本人の方は外出を控えておられる様子が出ていますので、これは全国的な兆候かもしれません。今回の美術博物館の展覧会、来館者数で苦戦していると発信がありましたが、全体でも議論、集計取って分析してもいいと思いますね。東京オリンピックの時にも、こういう状態になっている可能性がありますので、現象として分析する必要があるのではないかなと思います。昨日、関西で博物館関連の会議があり、京都・奈良・大阪の方たちとお話をしましたが、少し様子を見てデータはきちんと把握しておかないといけないという議論になりました。

それでは協議会の議題が三つ予定されておりますので順番に検討していきたいと思います。まず、令和元年度事業報告について、事務局より説明をお願いします。

（事務局：石田）

この議題につきましては、美術博物館の石井館長から説明させていただきます。石井館長お願いします。

（石井館長）

それでは、議題1について説明させていただきます。

…………… 〈令和元年度事業報告の説明〉 ……………

（藪田会長）

お手元の資料3から資料5に沿って総括いただきましたが、それをご覧頂きながら皆さんに議論をしていただきたいと思います。

（若林委員）

今回の展覧会は2回拝見しました。折角「お、気合い入っているな」と思ったのですが、かなり空間が広いにもかかわらず、座ってゆっくり見られるような椅子が、ゆっくり見られるっていう空間がないんですね。それと、キャプションも何かわかりにくい。私がそこまで感じ取る力がないのかなと思いましたけど。空間の使い方がとても贅沢ですね、今回。と言うのは、作品が少ないということにも通じるのかなと思うんですけども。それと、暗闇の中に入って音と光源を鑑賞するって

言うのがありましたね。あれは急に入ると目くらましみたいになって、ちょっと危ないですね。あそこにも椅子があってもいいんじゃないかなと思います。真っ暗な異次元の世界みたいなものを鑑賞するのに、立って見るか、床に座り込んで見るとか、そういうことしかできないので。それと絵画のタイトルですが、ルビを振るというのはあんまりしてはいけないことなのですか。例えば、白髪一雄さんの作品は、読み方がわかりませんでした。作品にルビがあって、その音でこの作品はこういう題名のついた作品なんだって言うことが頭に入ってくると思うんですが。

(藪田会長)

ありがとうございました。星野さんどうですか。

(星野委員)

私はなかなか難しいなと思いました。音と光と、額縁を並べてあるけど、最初見た時はよくわからなかった。津田さんとか久門さんの講演を聞いたり、学芸員のギャラリートークを聞いて、楽しみ方を教えてもらったというか。ただ面白かったのはやっぱり、津田さんの作品を作るモチベーション、鏡の額縁を見ると気づかない自分に気づいて、それが何か見えないところが見えるって、作品だけを見てもわからないけど、あの解説を聞くと、そういう考えで作品づくりをされているという事がわかりました。美術館の展示は、ある時は子ども向け、ある時は大人向けとかマニア向けとか、一年で見たらと揃うという考えかなと思いますし、又、学芸員さんの説明もそれに応じた目線でやられてると思います。今回の展示の学芸員さんの説明はどっちかというとなマニア向けと思いますが、まずは楽しみ方を教えてもらわないとわからない展示だなと思いました。今後のお願いですが、一つの展示に複数の目線のギャラリートークを開催して欲しい。非常に欲張って、マニア向けと、もうちょっと一般向け、出来たら子ども向け、年寄り向けもあるといいんだけど。そんなこと考えてもらったら、もっと楽しめるんじゃないかなって思います。歴史の方は、ガラス越しに「昔のくらしの展示」を見るのはちょっと寂しいというか、少なくとも露出展示みたいな感じにして欲しい。とうみ、あれは触ってもいいってことらしいですが、何かやっぱり触れる、さわれる展示にしないと。せっかく子どもが来ても、ガラス越しに私どもが少し前まで使っていたようなトースターを見るのでは物足りない。肌で感じられるようにしたらもっといいと思います。

(藪田会長)

ありがとうございました。いいご指摘だと思います。

(中島委員)

「絵の見方」という本を読むようにしているんですが、なかなか読んでいても難しい。やはり一つの作品を見る時にただ見るだけじゃなくて、その人の作っている背景だとか、どういう時に作ったのか、何年頃に作ったっていうのを知っていて絵を見ると、知らなくてただ見るのとではやっぱり違う。「どこかで見た絵だな」なんて絵を見ると、「読んだことがあるな」とかこういう説明を聞いたことあるなってことがあると、「あ、これはこうなんだな」「あの人が言っている表現はこういう意味合いでこういう風に解説しているんだな」って言うのが、何かわかるような気がするんですけど、そういう環境作りはやっぱり必要じゃないのかなって最近思っております。

(藪田会長)

はい。安部先生はどうですか。

(安部委員)

私は7月13日から9月13日までにありましたコレクション展・こどもとおとなを自分の家族と見に来させていただきました。息子の話なのですが、作品を見ながら色々なつぶやきが出たり、子どもたちが直接メッセージを書けるブース、楽しめるブースがあって、いつもだと色んなところ行っても「早く帰ろう」「外で遊びたい」ってことを言ったりするんですが、この時は1、2時間はじっくり作品見たりして、ワークシートもあったと思いますが、それも書いて時間を過ごすことができました。季節も良く天気も良かったので外で帰りに遊んだり、時間を過ごすことができました。今回の展覧会も先ほど見させていただきましたが、学校教育の視点から言ったらワークシートは難しいのかなと思います。ただ、内容によれば作れることもあるのかなと思います。あと、若林さんも言われた作品のルビ、歴史は下の方にあっただけです。ただ上の方には一切ルビがなかったので、大人が読んでもわかりにくいなと思いました。子どもが読んだら絶対にわからないので、ルビがあれば子どもも楽しめると思います。題名とか内容が難しくても、子どもは子どもなりに感じて、作品を鑑賞するものだと思います。普段の彼らの様子を見てみると、音とか映像、特にゲームとかも良くしますので、2階の映像と音のところで子どもたちが入ったらどういう反応するかなという視点で見ました。ただ音が大きいので、作家さんの意図もあると思うのですが、子どもたちによったら怖いなど、ちょっと入れないなど、暗いところがダメな子もいますので。もし子どもを連れてくるとなれば、ちょっと子どもは敬遠してしまうところはあるのかなと思いました。ただ津田さんの映像の作品ですね。これはとても興味深いなと思いました。子どもたちもすごく楽しむと思います。仕掛けがあるような、子どもたちが見ながら考えていけるような、作品を辿っていけるものだったと思いますので、そこは楽しいかなと思いました。あと、私も好きで美術館のチラシとかもよく見ているのですが、このチラシを見た時にちょっと何の展覧会なのかっていうのが伝わりにくいかなと思いました。チェコの絵本の時とかコレクション展のこどもとおとなだと、チラシを見た時は、何となくこういう風な作品が並ぶのかなとか、「行ってみたいな」「面白いな」というような感じはするんですけど。写真も綺麗だし、おしゃれなんですけど、パッと見た時、こういう映像の展示なのかな、写真なのかなって。そこから読み取ることも面白いかもしれないんですけど、ちょっとよく見ないと「行ってみよう」に繋がってこないかもしれない。次回、芦屋の造形教育展があって、その後に音楽の展覧会もあって、これもおしゃれだなって思ったんです。チラシを見て最初ジャズのレコードジャケットを僕はイメージしたんですけど。パッと見た目で、第一印象って大事だと思うんです。行ってみようかなと、家族で行こうかな、子どもで行こうかなってところも繋がってくると思いますので、宣伝と言うかそういう部分でも、どんな作品があるって見えてくるような内容があってもいいかなという風に感じました。

(藪田会長)

岡副会長、どうですか。特にインスタレーションはこういう風に見て、どういう風に評価するものなのかわからないので、その辺もちょっと教えていただきながら。

(岡副会長)

運営する側から美術博物館の今回の展覧会を見たら、ああなるほどこういうインスタレーションの為に作られた、建てられた建物だと。前は非常に辛口で言ったのですが、これはぴったりの本当に美術博物館によく似合っている展示です。でもそれは、大阪の国立国際美術館がされるような展示で、でも国立国際美術館にその為だけに行くのではなくて、他の展覧会、大きな特別展を見た後に、常設展示を鑑賞して現代美術のインスタレーションを観る。ですから、お客様にまず来ていただかないといけませんので、その為の、ふらっと芦屋に来たから、美術博物館に行ってみようとした時に満足度をどこまで得られるか。それから、入られたお客様がどれだけ滞在時間をそこで過ごせるかっていうことを、仕掛けを考えないと。インスタレーションが素晴らしいでしょって言うだけのはちょっと。本当によくできた展示で、今回はああいうものです。衝撃を与えるような、そんなものですから。それはアーティストの考え方が反芸術と言うか破壊芸術と言うか、現実破壊とか、人間の感性を揺さぶるものでなければ、床の間の的なものではだめだって言う方向から出ているものですし、吉原治良も人のまねをするなって言うのはそういうことなんで。長谷川三郎がまさにそういうことを提唱したんですね。それはダダイスムと言って反芸術の中から出てきたもので、つまり芸術というものに対して、もう一度リセットし直して自分たちの立場を見直せって言う、それは第二次世界大戦なんかの前から起こってきたような、社会変動の中に生まれたものですから、そこだけを切り取ると足場を崩されたような、不安を覚えさせるような、あるいは不快を覚えさせるような、あるいは汚いものかもしれないとかね。それも歴史的な中で出てくる。いきなり提示されて、街で普通に日常生活している人がそれを見ると、やっぱり恐怖感とか不安感とか、それを芸術として見なきゃいけないのかというような葛藤を与えてしまうんですね。それはそれであっていいんです。そういう出会いの場が美術館なんです。ただ僕は、芦屋の歴史を感じさせるようなもの、つまり美しいもの、工芸品なんかでも優れたもの、それからやっぱりいつ来ても小出檜重が見られて、芦屋を代表するものですね。芦屋の歴史を感じさせるものがどこかの常設展示の中で、1コーナー、一つの壁面を作ってあげておいたら、年配の方でも、小出檜重はいいよねとか、吉原治良でも、長谷川三郎でももちろんいいんです。こういう人たちが提唱して、その歴史の中でこういうアートの結びついたんだっていうことを伝えなければ、須田剋太だって長谷川三郎が出てこないし出てこないし。だから須田剋太だって出したらいいし、自分たちの風景をこのように画家たちが捉えたんだと言うこともですね。つまり、多少口当たりがいい、子どもも見られる1コーナーを。それから、歴史でもいいんですけど、美術としての掛け軸とか屏風とか、仮設でもいいからどこかに展示する場所を作っていかないと。この美術館は現代美術として本当に似合っていて素晴らしいんですけど、国立国際美術館に来るような現代アートを好きな人がここにわざわざ足を運んでくれるかと言うとちょっとそれは立地が悪い。だから、現代美術だけじゃなくて、そこにその歴史を。美術博物館の役割って言うのは、もう一室ぐらい常設展示があって、小出がいつでも見られるようなことをどこかでできないかってことですね。じゃあ運営する側はどこでしたらいいのかって言う問題があって。階段を上がっていく途中でもちょっと難しいかもしれないけど、そこは工夫で一室を設けてほしい。

(若林委員)

菅井汲の作品はいつも常設でかけてありますよね。

(岡副会長)

具体に限った話でもなくていいんです。そこは長谷川三郎がいてとか、理論的な中で、本当に戦前の草分け的な美学者としての長谷川三郎の意識はやっぱりあって。その中で前衛の動きと保守的な動きがあって、その両方をきちっと見せてあげる場所が、常設展示であってでもいいかなと。そこをしておけば、この現代美術がもっと映えるかなと思います。現代美術に全部占拠されてしまったような感じだったのがちょっと。お客様としたら「良いか悪いか分からない」という人と「これは凄い」「国立国際美術館が芦屋にできた」みたいな感じの人とに別れると思います。今回の展示は素晴らしい良い展示です。でもそれは我々みたいな仕事をしている人は良いんだけど、ちょっと子どもさん、おじいちゃん、おばあちゃん来られても、面喰っちゃうんじゃないかなって思います。だからそこは、1階のところをもう少し考えて何とかできないかなと思います。戸惑いを与えて帰しちゃうっていう感じになっちゃうので。それは説明もですね。

(若林委員)

新聞の記事をよくよく読んで、今回の展示ってこういうことなんだなというのがわかったんですけど、ちょっと展示場にこの「数」に結び付くものが希薄だった気がするんです。どこで「四海」になって「数」になるのかちょっとわかりにくかったんですよね。

(岡副会長)

企画する学芸員が突っ走るんですよ。それを「君は楽しいかもしれんけど、お客様はどう思う。」って引っ張らないと。俗受けするというのは、結局わかりやすくするということです。そういう努力を、やっぱりそういう場所を作ってあげないとカッコいいところ行っちゃうんですね。その手綱が大事で。

(若林委員)

チラシがおしゃれって言う話が安部先生から出ましたけど、1か月ぐらい前にどんな方が見に来られているんだろうと思って、観覧者の方にも注意を向けてみたんですよ。そうするとおしゃれな人や若いカップルが多かったです。だから、そういうことに興味のあるおしゃれさんみたいな人が結構この展示見に来られているのかなって思いましたね。

(岡副会長)

私もおしゃれなイメージしたんだけど、住宅地を歩いてこないといけないんですよね。

(若林委員)

住宅地を通る道じゃなくって、川沿い。芦屋公園の横を通って来るルートをもっと仕掛けたらいいと思うんです。

(岡副会長)

市長のお考えでそうすればいいと私も思う。吉原治良を再現してもいいと思うぐらいです。そこから美術博物館へのルートをね。

(若林委員)

でも道路看板は住宅街の方に誘う看板なんですよね。車で来た時、公園の半ばで曲がって、美術博物館の方に来るでしょ。ちなみに道路看板一つ増えましたか。

(事務局：茶嶋)

元々あったものを新しくしました。

(若林委員)

せっかく川沿いの美しい景観なので、前から言っているんですけどあそこから美術博物館に誘うみたいな道の仕掛けが良いと思う。そして臨港線の、防潮堤と言うか、あの絵何とかしましょうよ。

(藪田会長)

いつもおっしゃっていますね。

(安部委員)

私、子どもの頃に描いているんです、あれ。

(若林委員)

そうでしょ。上塗りするのが良いのか、全く違う視点のものが良いのか、それはよくよく考えて。もう本当に劣化していると思います。景観条例に触れる部分も出てくるかもしれないけど、描いたらまた10年20年そのままですからね。あれ何とか考えませんか。80周年記念ですから、芦屋市。

(岡副会長)

まとめて言えば、もう少し常設展示で所蔵品を出す。あと、日本画の何か展示ができないかなと思います。芦屋の歴史は、やっぱり伊勢物語があって。昔は美術博物館で「芦屋」を主軸にもう一度教育するようなことがあったと思うんです。芦屋川もあるんだし、芦屋に特化したようなその場所、昔の芦屋の風景とかね。常設展示の中でその一角はいつ来ても見られるっていうのと、現代美術っていうことで、総合的にもう少し作品を出してもいいかなと思います。特別展を見て、それに何かプラスしてお腹がいっぱいになって、喫茶でも行こうかとなればいい。前衛的なものだけが与えられて、お客様が来ないのは仕方がない。

(藪田会長)

メインディッシュだけじゃなくて、定番のお料理が周りにある。安心感みたいな。

(岡副会長)

年配の人も子どもも見られる、「芦屋の美術博物館だから」っていう教育なんでしょうね。我々もどんな時でも小磯良平は必ず出します。小磯を忘れられてはいけないから。でも、小磯のファンは、70歳とか80歳になるんです。若い子たちを教育しないと共倒れになってしまいます。そこをどうするかっていうことで、展覧会を作らないといけない。両輪を考えていかないとやっぱり具体だけですと来ないですから。小出櫓重もあるので、信濃橋洋画研究所とか田村孝之介とか。そう

言う流れで芦屋発信の芸術，芦屋に特化するっていうことが，誇りを持つっていうことです。阪神間モダニズムの流れでやられたらやっぱり，それは切り離せない。

（藪田会長）

今の「四海の数」展だけでなく、構成，組み立て方のご意見でした。私もどんな展示かなと思って、観て初めてインスタレーションだったと分かったぐらいなので、タイトルだけではちょっとイメージできなかったです。そういうことから考えると、アイデアの先走りをしない。やはりそこに行つて是非見たいものっていうのがあるので、それが常に見られるかどうかっていうのは、どんなメッセージ性を送っていてもという話をされましたが、それは僕もそう思います。長谷川さんのかまぼこ板の話つてとても面白くつて、あの続きをもうちょっと見たいと思いましたが、長谷川さんの位置付けそのものつて先ほどご説明頂いて初めてわかつたので、あれ見ている限りではわからないです。縦軸があるんだつたら、横軸があるとかみたいな形で、組み立てをもうちょっと考えられた方が、新しいものは理解しやすくなると思います。昔の暮らし展は、おそらくずっとやつてこられたものですよ。そういうところから考えれば、定番だつたと思うので、それほど評価の変化はないと思うのですが、今の時点でなにかありますか。先ほど、星野委員から「昔のくらし」展に関して、露出展示が少ないとのご意見ありましたが、これは僕も感じました。今までの経験の中で露出展示をしないっていう風に決めてこられたのか、たまたまそうなつたのか、どうですか。

（石井館長）

あの広さで、ガラスケースが入つていてという構造的なところで、ケースの中に並べることにはなつています。真ん中に置く場合には別の展示ケースに入れる形ですね。確かに露出展示は少ないですが、できることはできると思います。

（若林委員）

土器に関してご提案した時に、早速触れる展示をしてくださいました。あれすごくうれしがつた。

（石井館長）

それは工夫できるとつ思います。やつていきたいと思ついます。

（中島委員）

コレクションはたくさんあるんですか。

（室井学芸員）

多少偏りはあるんですけども、昔の暮らしの部分では一式は揃つています。

（藪田会長）

触ると絶対消耗していきますから。消耗しても替えが効くものであつたら、消耗させたらいい。全部消耗させないので昔の暮らしをやつたら、頭の中でしか昔の暮らしがわからない。サザエさん見ているのと一緒じゃないですか。実体験することのない昔の暮らしにどこまで意味があるのかつていうことかと思ついます。今は消耗してでもいいからやるということも踏まえて、持つておられる

コレクションと天秤にかけて考えてみてください。道具とか家具とかっておそらくそんなに少なくもないと思う。

(星野委員)

姫路の歴史博物館に行くと、柄杓みたいなもの（実は中に炭を入れて使う昔のアイロン）が、小さなタンスの上に置かれている。何かなと思って引き出しを開けると、現代のアイロンが入っていて、新旧のアイロンの違いが一目でわかる様になっている。五感だけでなく、遊び心も取り入れたり、色々工夫が行き届いていますね。

(岡副会長)

芦屋の戦前に建てられた邸宅の整理を手伝ったことがあって、昔の暮らし、芦屋の暮らしについても凄くお金持ちの凄いのがいっぱいあって、松方コレクションの大きな油絵が飾られてあったりとか、ここでダンスしたんですよって山荘風のところがあって。そういう庶民文化と違うんだということのを売りにされてもいいんじゃないかと僕は思っています。それが芦屋文化で、芦屋に対してのイメージ、そこを市長も売ろうとしていて、阪神間モダニズムの誇りを持てるようなものを展示したらいいのにとあって。

(若林委員)

ヨドコウもここで紹介していいと思います。この間、子どもたちを20人近くヨドコウ迎賓館に連れて行って見てもらったんですけど、心惹かれていました。襖の取手が面白いとか、窓の一つ一つに色々意匠がありますけど、子どもたちも強く惹かれていました。学校に帰って、今日印象に残ったものを書いてみようって言ったら、やっぱり窓の意匠を書いてみたり。自分なりにデザインしてみようって言ったら、それもまた描いていました。ヨドコウのあの建物って素晴らしいなって思っています。

(藪田会長)

建造物の持っている魅力ですね。

(星野委員)

神戸市立博物館がリニューアルしました。一階の通史展示を見ると、縄文、弥生時代は、数個の土器が置いてあるだけです。すぐに中世の大輪田の津が登場し、引き続いて神戸港の開港が大ジオラマと共に紹介され、締めは阪神淡路大震災です。古からの港神戸、神戸開港、神戸らしさを全面的に押し出している展示、メリハリの利いた展示と思って見ました。今の美術博物館に置き換えると、歴史の展示場に入って、土器を数個見たらすぐ、近世、近代の芦屋になって、メインの阪神間モダニズムが登場するそんなイメージになるかなと思います。

(岡副会長)

芦屋を訪れた方が、お屋敷とか邸宅とか「西の田園調布」ってイメージでおられて、それに応えるような工芸品でも打出焼きでも何でもいいんですけど、そういうのを見せないと。大阪の商人たちがお屋敷を持っていてとかそういうことも含めて、常設の中で語られればいいかなと。こん

なに素晴らしいんだと感動させるようなことをね。美術もそう。戦前の美術も現代美術も面白いんだっていうことを。そのバラエティ, 対比をもう少し意識したほうが良い。今日の展示ではですよ。現代美術の展示という意味ではとにかく素晴らしい。本当に立派です。

(藪田会長)

安部先生、昔の暮らしについては、ずっと学校でも教えておられますが、美術博物館との連携はどうですか。

(安部委員)

そうですね。3・4年生とかで、見学に来ていますね。僕は教科が図工なので、一緒に連れて来ることはないんですけど、芦屋に関わらず、「昔の人はこういう道具を使っていたよ」っていうところから始まって、ここに来ていると思うんですけど。

(藪田会長)

あれは教科書に標準で出されていますからね。そこの影響力が強いですよね。その土地ごとに地域差や階層差もあるはずなのに。

(岡副会長)

そういうのがほんとは大事なことかなと。芦屋文化に対して、それはそれで知っておかないといけない。それをこういうところで見ることができたら良かったのと思う。

(藪田会長)

打出焼きは出していましたね。

(岡副会長)

打出焼きはありましたね。そういうことが大事かなと思って。奥様方もデパートに行って、銀器とか何かそういうものを、普通に使っていましたよって。そういう文化を出せばどうかと思います。他の地域だったら別ですよ。この美術博物館だったらそういう側面もあっていいんじゃないかと私は思います。

(藪田会長)

凄く優しくて励ましのある発言でしたので、受けていただきたいと思います。それでは、一年間のまとめはこれぐらいにさせていただきます、次に令和2年度の事業計画に入りたいと思います。よろしくお祈いします。

(室井学芸員)

それでは、令和2年度展覧会事業計画(案)について、説明させていただきます。

.....室井学芸員からの説明.....

(藪田会長)

一応計画が詰まっておりますが、進め方とかあるいは留意していただきたいことなど、おっしゃってください。

(岡副会長)

大コレクション展を期待しています。それで、やっぱり自分ところのものを知るということは、収蔵庫から出して、図録を作られますか。

(室井学芸員)

今のところ、まだ検討中です。

(岡副会長)

成果物を残さないと次に繋がらないんですよ。だから、冊子状のものでもいいから何か作ってそこに書き込まないと、ネットとかウェブに掲載して言うのは、最終的には残らないので。お金の問題があるから難しいかもしれないけど、とにかく何か自分たちのコレクションの図録を残したら、恒常的に売れるとか。所蔵品を知ることとはすごく大事なことで、指定管理だったらそこら辺はどうしても弱くなるという見られがちなんです。我々もそういう風に思ってしまうので、できるだけこの大コレクション展で自分たちの所蔵品をもう一度洗い直して、良いものを出す。それともう一つの視点として、藪田先生はブラタモリに御出演になっています。何故ああいう番組を私が見るかと言うと、結局我々みたいなうるさい人間でも見るんです。ゴールデンタイムで、日本中が見るんですよ。何で見るかと言うと、今までと違う視点を提示するわけです。そういうことを「昔の暮らし」でも、芦屋の人が目から鱗が落ちるようなことを提示して欲しいけど、センスだけでなく、知識がないと出てこない。学芸のスタッフの方はそこら辺をうまく、芦屋の人も知らなかったっていうのを、吉原治良のことだって結局芦屋の浜の松林の中で展覧会をしようとする一種の講演みたいな気持ちの中でやっているわけですね。それがレクリエーションの場所でもあったわけで。藪田先生を含めて色んな人たちの知恵を借りれば、「芦屋文化というものは」というのを、コレクションとは別に提示できると思う。お客さんが「面白かったから今度行こう」とか、それをテレビで言ったら、マスコミがそれを捕まえてくれるとか、何か切り口をうまくやれば。そういうことがちょっと足りないかなと思います。掘り下げていくというか、展覧会を流すだけじゃなくて。美術館のアイデンティティーというものをコレクション含めて、来年度は是非やられることを期待しております。

(若林委員)

私は芦屋スポーツものがたり、これ本当に充実したものにしていきたいなって思っています。山手の地域で「スポーツクラブ21山手」で会長していますけれども、昔、芦屋にもそうそうたる選手の方々がいらしたんです。サッカーにしるテニスにしる陸上にしる、カヌーなんかもやっていますけれども。昔の話を聞くと「そうだったんですか！」って言うような華々しい時代があったんです。今、芦屋がどのくらいスポーツで盛り上がっているかって言ったら、ちょっと寂しい現実があると思うんです。施設も少ないし。ちょうどオリンピックの時期にこの企画をされるということで、芦屋のスポーツの歴史を深く掘り下げていただいて、市民の方々に知っていただくことはとて

もタイムリーな企画だし、いいことだと思います。私どもの会議でこんな方、あんな方がいらしたんですよって言うのを刷り物にしてお配りしても、どこの誰みたいな感じになってしまっているんです。こういうことに的確なアドバイスをくださる方も私は懇意にしておりますので、もし必要であればそういう方のご紹介もさせていただきますし、期待しています。

(安部委員)

私は12月5日から迷路の絵本展、その流れから造形教育展に繋がっていくのがいいなと思いました。まず、家族で楽しめる絵本展があつて、一週間後に芦屋市内の子どもたちの作品が、この美術博物館にずらっと並ぶということで、その展覧会の流れ的に前に1回家族で来て、自分たちの子どもさんの作品がまた並んでいるから来られるということで、家族で来られるような展覧会が続いていること、これは結構大きいと思います。造形教育展に関して言えば、各学校で幼、小、中で選ばれた子どもたちの作品が千点近く並ぶんです。それぞれの小学校、芦屋は8校あるんですけど、毎年図工展をやっています。この図工展を毎年しているところはなかなかないんです。他市で言えば、西宮とか尼崎とか近隣でも毎年はしていません。芦屋はずっと昔から毎年図工展をやっています。それぞれの学校の図工の先生であり、研究されている先生であり、たくさんの方が学校外からも見に来られます。造形教育展も出品しているお子さんの保護者宛てだけではなく、色んなところに発信して欲しいんです。そうすると、幼児造形とか造形教育をされている先生たちも足を運んでくださると思います。芦屋市内の子どもたちの作品が並びます。それで終わりにするのではなく、ここに来たら造形教育の発達段階、子どもが大きくなるにつれて、こういう風に表現が変わっていくんだと、そういったところが作品を通して見ることもできますっていうような発信を、学校だけではなくて、色んな教育関係機関にもしていただけたらなと思います。そういう意味で、迷路の絵本展から家族で来られる、見に来られるって言う展覧会の繋がりにて言うのは、とても期待できるなと思います。

(星野委員)

私は、芦屋市制80周年とスポーツってなかなか面白い切り口かなと思っています。先の東京オリンピックを知る方もご健在だと思いますし、色々な歴史やよもやま話をご存知だと思います。この間の土器作りのワークショップでは、生涯学習課とうまくコラボされて、生涯学習課の学芸員さんが土器や芦屋の歴史について説明されていたのが印象に残っています。芦屋の歴史は、生涯学習課の学芸員さんが一番よく知っておられるので、今後の歴史展示のありかたとか、ボランティア育成などの課題に関しても、先のワークショップと同様に、上手くコラボされて進めるのが実現の近道だと思います。今後の歴史展示の展開を楽しみにしています。

(中島委員)

この予定の中で一番のメイン、力点を置いた企画はどれなのか。これって言うのがあれば、それを私はPRしたい。今年はこれが一番メインだから、みんな来てよって声かけるので。

(石井館長)

芦屋のスポーツものがたりは、こちらからの提案なのですが、今おっしゃっていただいたように、調べているとかなりいろんな方が出てきますし、その後に影響を与えているという方がいらっしや

います。調べれば調べるほどどんどん色んなことが出てきています。礎を作った方が結構いらして、芦屋高校も甲子園で優勝しています。私も初めて聞いた時は、本当かなと思ったんですが、優勝している訳ですよ。昨日もスポーツ推進課の方と、打合せをさせていただいて、そこも連携しながらいい形で皆さんにお見せできればと思います。なかなか美術館・博物館でスポーツはやらないと思うので、いい機会ですしやっていきたいと思います。

(若林委員)

ちょうどオリンピックの時期ですから。

(中島委員)

夏休みの期間に入る訳ですが、こういうたたき台が出来上がるのはいつぐらいですか。こういうパンフレットを是非配りたい。ちょうど夏休みで子どもも来てもらえるから、もう少し集客力があるパンフレットを作ってもらいたいと思います。行こうよと引きつけになるので、そういうものを作ってほしいと思う。これ6月から始まるんだったら、もうそろそろ出来上がってきますか。

(室井学芸員)

年間スケジュールみたいな全体像は、3月4月には出来上がるのと、具体的に細かい展覧会内容に関しましては、2か月ぐらい前を目標には、皆さんにはしっかり告知できるように動こうかなと思っております。日程、内容を知ってもらって、来てもらえたらと思いますし、それに合わせて色々なことをやっていきたいなと思っております。もうしばらくお待ちいただければと思います。

(安部委員)

あと、ワークショップも夏休みにされていますね。折角なのでスポーツと融合したような、大人も子どもも体験できるようなワークショップとかも是非やっていただきたい。良い庭もありますし、子どもたちも普段よく遊んでいますし。場所も有効的に活用されたワークショップの企画なんかもしていただきたいなと思います。あと、学校にまかれるチラシも薄い紙に水色で字が書いてあったりするので、カラーであったりとか目を引くようなデザインをされた方がいいと思います。予算的なものもあるかもしれないですけど。学校に届いて子どもたちに全部配るのですが、子どもが帰って、「はいお母さん」って渡すだけではなくて、子どもが自分で、ランドセルに入れる時に「おっ面白そうやな」みたいな、せめてそういう時に子どもの目を引くような色合いとかを使ってもらえたら、また変わってくるかなと思います。その辺りも是非していただきたい。

(若林委員)

そっちのアイデアも押したいし、芦屋のチラシのおしゃれさも継承していつてもらいたい。「芦屋っておしゃれ」みたいなそういう部分。

(安部委員)

広報あしやが凄い。写真が変わって凄く雰囲気が変わりました。

(若林委員)

とても見やすいです。やっぱりそういう工夫って大切なんですね、イメージを植え付けるのに。それと藍のファッション展ですけども、この時にファッションデザイナーなんかも呼ばれる予定はあるんですよね。もう人選も決まっているんですか。

(石井館長)

そうですね。もうギリギリのところまで最終調整に入っています。

(若林委員)

愛媛のタオルデザイン手掛けられた佐藤可士和さんっていらっしゃるんです。彼が、何年か前に神戸新聞に短い文章ですけど、「東京在住ですけど、芦屋に来たら落ち着く」って言う文章を書いてらっしゃったんですよ。と言うのは、この街はアイデンティティーがぶれてないって言うんです。そういうファッション関係かつ芦屋をこよなく愛している人が来られて話していただくと、凄く市民としても誇りが持てる。そういった方の話も聞いてみたいと思うのですが。

(石井館長)

展覧会の開始が4月なのでもうだいたい決めているところです。

(藪田会長)

実際やってみれば違和感とかが見えてくる。やる前には見えてこないんですけど。まあそれだと話が進まないの、やる前からやってみた後のことを予見するには、できるだけ複数の人たちの意見を聞くということですね。担当学芸員のアイデア倒れにならないでと言う、それが今日出た意見の趣旨だと私は思います。そういうことを考えたら、スポーツはうちでも甲子園をテーマにやったんですけど人が入らないんですよね。スポーツって言うのは行って観るもので、博物館に行ってスポーツを見るなんてあんまりないんです。思ったほどないんです。やっぱりその場で見ているからスポーツは面白いのであって、冷めてしまった時に、去年のワールドカップを今って言ったって、誰も来ないです。そういうこと考えたら、スポーツをどう見せるかって言う大変大きな問題があって、オリンピックだからスポーツと単細胞的についていくほど世の中の人には純粹でもない。芦屋のスポーツでオリンピックだとこの人だと言うシンボリックな人がいたら別ですけど。そうでもない中だと余計に難しい。

(若林委員)

猿丸元芦屋市長なんか陸上のかなり有名な方です。こういう方がいらしたということ伝えるだけではちょっと弱いんですか。

(藪田会長)

そうですね。僕はスポーツものがたりが一番難しいかもしれないと思います。どっかでうまいこと勝ってくれたら話題になるし、誰か「私は芦屋出身で」と言ってくれたら、それでパッと盛り上がるかもしれないし、それだけはわからないですが

(若林委員)

私たちの立場として、この計画って言うのはスケジュールができる前に案として示してもらって、意見を挙げられるような立場ではないのですか。何か今言っても、もう色んなことが決まっているので、立場的にどうなのかなと思って。

(事務局：茶嶋)

指定管理を選定する時に、5年間のスケジュールとか、大体こんなことをしますというのも選定内容の中に入っているんで、ある程度前後することはあるんですけども、こうやっていただいている意見を加味して、考えているということだと思います。

(若林委員)

じゃあ補正していただける部分もあるんですね。

(事務局：茶嶋)

やり方ですとか展示方法とかですね。

(藪田会長)

岡副会長からどんなテーマでやってもここ来たら、良いもの見たと思って帰れるものがあるという、そうでなかったら、テーマがこけたらその期間全部こけてしまうので。そういう冒険的なことはしてはならないという意見がありました。芦屋らしさみたいなものを常にこの美術博物館が担保しておるんだということを年間通じて、ファッションのところでもそうだし、スポーツのところでもそうだし、大コレクションならもっとそうですよね。あるいは歴史の展示もそうです。その辺の切り口をどうやって指定管理と話をしながら担保していくのかということだと私は思います。

(岡副会長)

「芦屋」は大事なことです。芦屋の市民がこの美術博物館を愛してくださらないとだめだし、ここに他市のお客さんを連れて来て、見せて、自分も発見するけどお客さんに誇りを持って示されるようなものでなければならぬ。美術博物館を持ってしまった訳だから、それをいかに活用するか。逆に芦屋にこだわり過ぎて西宮と尼崎を捨ててしまったりとか、神戸を捨ててしまったりとか、大阪を捨ててしまったりとだめです。小出檜重だって大阪の薬屋さんの息子さんで、神戸の古道具屋さんで額縁を買ったりしている訳で、港町と商業の町の、その東洋のマンチェスターがなければ、芦屋と言うところの意味は出てこないし、阪急電車の意味も出てこなかったの。やっぱり、煤煙の大阪からいかにこのフレッシュな空気のある肺病にならないところに住むかっていうのは、潮風によって肺病にならない別荘地、それが別宅から本宅になっていく訳で。芦屋文化と言うのは、そこが基本で、二つの港町、文化の先進地と商業の町との間に出てくるその経済的な母体と文化的な母体っていうのが常にあって、それを全部芦屋だけで全部完結するんだということを私は提案している訳ではないです。芦屋文化と言うものをもう少し広く考えて、阪神間モダニズムを先進で行くんだぐらいの規模でお考えになった方が、神戸の人にも来るし大阪の人にも来ると思います。だから、あんまり小さく考えなくてもいいと思います。神戸はじめ物語というのを昔、私30年前に作ったんです。そうすると、やっぱりスポーツが凄く困る。ゴルフが最初だということで、その始球式の真っ黒のボールとかパターとかしかなない。後は写真。それとドーナツって人が六甲山を登った登山靴、そう

いったものしか残ってないです。スポーツは結構展示が難しい。パネル展示になっちゃうので。やる側となったら、このテーマは大変だと思う。だからもう少し広げて、芦屋の中のスポーツ振興の歴史みたいな感じでやられたらと思います。阪神間のスポーツの歴史でもいいし、甲子園を巻き込んでもいいし。僕はそのように思います。僕は何度も言いますが、コレクションをきちっと、出来たら書き物も、小さなパンフレットでもいいから残されて、それをもってこんないいものがあるよと。近代だけでなくてやっぱり古いところの歴史も、収蔵庫の中でこういうものがあるんですって言うのを皆さんでブラタモリの視点で考えられてやられたら、芦屋の人もその本を買ってくださると思う。

(藪田会長)

今日はA3の資料を作っていたんですけど、今日の議論聞いているとアンケートで年齢とか居住地とか聞いておられるみたいなので、このペーパーの事業名と実施内容の後ろに備考みたいところで、アンケート結果をつけてくれませんか。例えば市外の人何%とか、これは子どもたちが多かったとか。実施内容だけだと今我々が議論していることしか残りませんので。アンケートで色々なデータが集められると思うので、意図した企画についてはそれを併記していただきたい。次回からお願い致します。

(藪田会長)

それでは最後、その他のところで、具体美術の周知についてのご提案があります。事務局から説明をお願いします。

(事務局：石田)

それでは説明させていただきます。

.....事務局から説明.....

(若林委員)

10年前ぐらいは具体、具体ってそればかりだったんです。とにかく具体はとっつきにくいっていう、そういう風潮というか頭に入ってしまって、具体ってどんなに難しいんだろうって思っていたんです。最近海外からどんどん注目されてきて、大阪の新歌舞伎座跡地に建設されたホテルのフロアとかそんなところにも盛んに具体の作品が採用されているって新聞記事を目にしまして。逆に芦屋の人、日本人よりも海外の方々の目が、具体に惹かれているなと感じて、逆に教えられていると感じることが多いんです。もう1回そういう視点で、芦屋が具体美術の発祥の地だっている事を、もっと誇り持って胸張って、皆さんにご提示されてもいいかなって思います。何かこう観念から先に入っちゃったみたいなどころがあると思うんです、もっととっつき易く発信していただけたらいいなと思います。

(安部委員)

学校で考えたら、例えば、教科書に美術館に行ってみようというページがあって、鑑賞のページがあったりするんです。子どもたちがここに来るのは良いことなんですけど、美術博物館側から、学校

の方にもっと呼び掛けて欲しいなとは思いますが。実際、授業時間数とか細かいこと言えばなかなか学校を抜けて行くって大変なんです。給食のこととか、そういうことを考えて動くんですけども、美術博物館側から学校に来ていただいて、小さい頃から芦屋には具体美術があったんだって頭に入れていくまでじゃなくて、子どもが知っていくってことは大事だと思うんです。子どもが知ってそのまま大きくなっていく。それで伝わっていくってこともあると思います。市民センターにも白髪一雄さんの作品があったりとか、子どもたちは結構行ったりするので、見たことあるって言う子も実際にいます。阪神間にも尼崎のアルカイックホールの緞帳も白髪一雄さんであったりとか、子どもたちの生活圏内で本物の作品があったりするので、それを子どもが知らずに過ごしていること多いんです。それを学芸員はじめ専門の方に来ていただいて、本物は持って来られないかもしれないですけど、写真とか持って来られるなら持って来てもらって、実際に子どもたちにこうやって描いたんだよとか、それをレクチャーするだけじゃなくて、何か体験できるものがあつたら一緒にさせてみたりして、まず子どもから知ってもらってことも大事なかなと思います。そうすると、子どもが知って家に帰って、親御さんにも話をすると思うし、家族で今度美術館に本物があるから行ってみようかなと、そういう風な流れにどんどん繋がっていくと思います。幼小中の段階から、学校側に足運んでいただけるっていうのは、学校側の動きを考えても助かるころなので、そういうところも考慮していただけたらなと思います。

(若林委員)

先生、まず足で描く体験もさせてみたら面白いかもしれませんね。

(安部委員)

私がやろうと思ったことがあって、実際尼崎に勤めている時にやろうとしたら、相当危ないですよと言われて、しっかりと掴まるものがないと本当にこけてしまうので。実際子どもたちは体に絵の具をつけて、ボディペイントみたいなのを幼児教育ともやったりするんですけども。そういうもの子どもは大好きです。その環境さえ整えて、安全面とか考えてやれば同じような体験というのは出来ると思います。そういうところからも広げられるかなと思います。

(星野委員)

周知という意味では、展示の回数的には、このコレクション展の中にも具体の作品もあつたし、周知自体は十分だと思います。後はご本人が興味を持って、どこまで入ってくるかっていうところだと思います。私自身は、今回の学芸員さんのギャラリートークに参加して、見方を教えてもらったなと凄く思っています。後はもう自主性の問題、ご本人さんがどれだけ食いついていくかの問題であつて、周知に義務があるかどうかはわからないけど、それは十分やっているかなって私は思います。

(若林委員)

学芸員が先走りしない、押し付けないって大事だと思いませんか。それだつたんです、かつては。

(岡副会長)

事務局は周知をさせたいと言っている訳ですか。知られてないっていう意味ですか。

(事務局：石田)

周りからもっと前面に出してやった方がいいと言われていたところですよ。

(岡副会長)

河崎晃一さんがおられた頃、私はまだ神戸市立博物館の学芸員だったんですが、その時に芦屋は、小出と具体だと、この二つでいくと。一点買うから他何点か寄贈してくださいといった風に作品をお集めになっていたんですね。それで、河崎晃一さんはご存じのとおり、山本發次郎の子孫ですので、つまりコレクターであって、それは一つの経済的母体があったんです。それから、吉原治良はもちろん吉原製油の息子ですから、社長であります。ですから、経済的母体とそれから精神的な雑誌とかを取り入れて、最新モダンの前衛美術の知識をどんどん吸収できた人です。それで、藤田嗣治が戦争になる前に日本に帰って来て、吉原治良が絵を見せた時に人の影響が強すぎるって言ったんですね。お前の絵は色々な物真似だって言ったんです。そのことが吉原治良にとっては凄い衝撃で。戦前の美術のショックの後、今度はアンフォルメルって言って反芸術みたいなものが、不定形の芸術が入って来ました。人の真似をするなど言う藤田嗣治の言葉が頭に浸み込んでいて、だから独創的なことした訳で、そうするともう白髪一雄の真似をして足で描いても、もうそれは物真似なのです。ちなみに白髪先生は絵描きなんです。あれは絵なんです。足で描いた絵なんですよ。のたうち回っている訳ではないです。パフォーマンスじゃないです。絵なんです、あれは。足で描かないと、手で描くよりも足で描いた方が力強く、より自分のイメージが表現できるからなんです。例えばこんなこと一つを説明するだけで、具体がどういう形で起こって来たか、その理論母体はどこにあったかって言ったら、長谷川三郎なんです。長谷川三郎がいた戦前の代表的な事の紹介は、長谷川三郎がどんどんやって、その人が関西にいて影響を与えたってことなんです。だから彼は一種のアジテータみたいなところもあるけれど、彼自身がモダンアートの先進であって、それが何故モダンアートをするかって言うと、やっぱり小出檜重がいて、信濃橋洋画研究所を開いてそのアカデミックな、東京美術大学何するものぞという一つの基準があって、そこにもう一つ東京中心の文化に対して、吉原は阪神間モダニズムの中で口出ししていこうというエネルギーと経済力があってという、創造力があってということだと思んです。そうすると歴史なんです、やっぱり。だから、歴史教育の中で、美術の流れの中で具体が出来ました、小出が出ました、長谷川三郎の理論が出ましたとかそのことの簡単な冊子みたいなものをどなたか、平井章一さんみたいな、彼は関西大学の教授になりましたけども、兵庫県立近代美術館から京都の国立近代美術館の学芸員を経て、具体の専門家なんですね。そういう人たちに簡単な冊子を書いてもらわないと。長谷川三郎を含めて、河崎さんが亡くなってしまったので、そういう人たちにわかりやすい子ども向けの「具体美術の美」とか「芦屋の美術の美」みたいな、前衛は必ず東京美術学校と言うアカデミックな教育があって、神戸の小磯良平みたいな明るい人がいて、そこに対してむしろ反抗みたいな、自分たちの存在をアピールするっていう。手で描くんじゃなくてでも何でもいいかもしれません。違うこと、人のやらないことをやれと言う藤田に言われたことの一つの裏返しみたいなところがあったんでしょうね。そこが、今みたいなお話したことでちょっと聞いていただくと子どもたちも、「わあ、なるほど」とか言う具体例を見せればわかりやすいと思う。だから、面白さなんです。画面の面白さなんです。アイデアの面白さなんです。そこが、その先生方が色々どんどん独自発展していきますから、ぶっかけていたものが、元永先生なんか全て描き始めますし、もっと子ども心にあるような、

沿うような絵に変わるんです。だから、僕は具体を周知させると言うのは、もうこれは周知されてしまいましたので、大阪の中之島美術館と兵庫の県立美術館が中心にやりました。白髪先生の作品は、億の価格がつくようなことになりました。尼崎が頑張ってる、そこはアピールしているんです。尼崎に住んでおられたから。だから芦屋と言ったらやっぱり、ここにあるものをいかに勉強されて、河崎晃一さんが集めたものを、もう少し芦屋のコレクションに見る具体の歴史、芦屋文化の歴史とか、そういう冊子、簡単に読めるような物語風な冊子を製作されて、それを子どもたち、大人たちの読めるように配布されたらいいかなと思います。お金かかりますけどね。本物はここで見てください。大きさがあからね。白髪先生の作品なんか、やっぱり実物を見ないと。長男を昔、幼稚園ぐらいの時に展覧会に連れて行ったんです。そしたら、長男が作品を観て「無茶苦茶や」って言ったんです。だけど、「無茶苦茶や」と言うけど、やっぱり迫力を感じたのかな。大きさが大事なんですね。そのことを忘れません。それが大事だったんでしょね。圧倒するパワーって言うか。

(若林委員)

もし冊子が出来たらこの実物を見たいっていう風に誘えたらいいですよ。

(岡副会長)

歴史があつてのことですから。何でも歴史的な事をちょっと言ってもらっただけで、色々なものがパッと開けてきます。いきなり色んな人のパフォーマンスやインスタレーション見せられても、ちょっとわからないとか気持ち悪いとか色々思うので。今の現代美術はみんなそうです。

(藪田会長)

ここが具体の展示を継続してやっていると言う風にまずは認められているかどうかと言うのをチェックした方がいいと思います。それから先ほどから岡先生がおっしゃっていましたが、別に芦屋だけが抜き出さる必要はないので、他館と連携してやるという具体のネットワークを作ることでもいいと思います。ここにある作品もあれば、兵庫県立美術館が持っている作品もあるわけで。もう一つは、私のところで美術をやる時に、美術のクラブって高校に必ずあります。その指導されている先生方との連絡協議会もあるんです。そういうまず一般の子どもたちというよりも美術が好きで、美術の基礎がある人たちが具体をどういう風に見ているか、兵庫県教育委員会の方と相談してみれば、連絡会があると思うので、そういうところと例えば具体について勉強しているのか、知っているのかとか、色々調査をしていただくとか。僕も先ほどからの説明でやっぱり、歴史があつて芸術の変化って起こる訳なので、誰かが発明、頭脳が急に変わったからそうなるって訳じゃなくて、そこにはそれなりに理由があると言う事で。ここは美術と歴史を持っていると言う事を考えた時に、ここだけの話だと思うんです。他の美術館でできないことがもしあるとすれば、歴史的な背景の中から美術に関わる説明をするということもあると思います。そうすると、美術博物館の趣旨・構想が達成されるように思いますので、ぜひ頑張ってくださいなと思います。

(事務局：石田)

ありがとうございます。今いただいた意見を参考に内部でもう一度協議させていただきます。

(藪田会長)

その他、委員の方向かありますでしょうか。なければこれで本日の協議会は終了させていただきます。ありがとうございました。